

非行傾向をもつ思春期の子ども達の発達課題と教育指導
～ 中学生の事例から ～

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
田華 茂

本論文における研究の目的は、思春期の子どもたちが広く社会に存在する規範に適応していこうとする姿勢を持って育っていくための教育指導のあり方としてどのような関わりが必要なのかを明らかにしていくことにある。特に非行傾向をもつ中学生の事例を考察する中で、これらの子どもたちの背景に存在する仲間関係への依存について取り上げ、思春期が新たな発達の力を獲得する時期であることをふまえながら、思春期における非行傾向の本質を見出すことを試みた。

中学生時期の非行傾向をもつ子どもたちの仲間関係には、関係の築き方やその関係に強く依存する面で大きな特徴が見られる。その仲間関係の特徴を決定づけている一つの要因として、学校生活の中で居場所をもつことができるかどうかという点を見過ごすわけにはいかない。居場所をもつということは、言い換えると自己の価値をその場所において見出すことができるということである。居場所をもつことができるかできないかは、思春期の新たな発達の力である新たな価値観をつくり出す力とも大きく関わっている。今回の研究を進めるにあたっては、思春期の内面的な心理的变化の特徴と新たな価値観をつくり出す力がどのように獲得されていくのかそのプロセスを辿っていく中で、思春期における課題を考察した。居場所をつくることができなかつた背景にはどのような課題が存在していたのか、非行傾向をもつ子どもたちの事例からいくつかの課題を見出した。

また、非行傾向をもちながらも立ち直りを見せた子ども達の事例を取り上げて、非行傾向をもつ子ども達の事例と比較しながら、非行傾向からの立ち直りに至るまでのプロセスを分析し、立ち直りに至った背景として、現実的な生き方を学ぶモデルの存在、複数の居場所としての仲間関係、異質な価値観に共通性を見出す人間関係、の3つをとらえ、思春期における仲間関係のあり方が非行傾向に与える影響について考察した。

これらの分析や考察から思春期の子どもたちへの関わりと教育指導においては、思春期の発達課題をふまえた上で、そこで形成される仲間集団が自己の価値観を形成する際に大きな影響を与えることに気を配りながら、子どもたちがつくり出す新たな価値の方向性を導くことが必要であるといえるだろう。